

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう!



第86回

養正館館長 渡辺貴斗



ウチの子、もしかして発達障害?(その2)

★手をつなげない

10年くらい前の話です。二人ペアでお互いに右手で握手して、交互に右刻み蹴り(外回し蹴り・裏回し蹴り)をするという組手の練習メニューがあるのですが(『競技の達人』第3巻参照)、相手の手をつなげない男の子がいました。この子は、みんなと一緒にすることができないことが多く、お母さんからは発達障害(自閉症スペクトラム)だと聞いていたので、無理強いをさせませんでした。「触覚」に関して過敏だった、もしくは、人の手に触れることが不快だったのかもかもしれません。感覚処理が特異的な人が世の中にはいます。極端に敏感(感覚過敏)だったり、逆に鈍感(感覚鈍麻)の人もいます。

道場でのそのときの対処として、拳サポーターを着けさせたところ、何とか相手の子と握手できました(ものすごく嫌そうでしたが)。日によってどうしてもダメなときもあり、そのようなときは、片手を壁に付かせて一人で蹴りをさせました。

皆さんも、手をつなぐことを極端に嫌がる子を見たことがありますか? そのときに、「お前、本当にやる気あるの!？」ではなくて、どんな工夫をすれば本人が快適に稽古を遂行できるのか、その不安要素、不快要素を取り除ける方法がないか、一緒に探っていけるとよいですね。感覚処理が特異的な人は、甘えているわけではなく、本当に無理なんです。私の息子はブロッコリーが食べられないのですが、「じゃあ、ブロッコリーと毛虫だったら、どっちを食べる?」と聞いたことがあります。彼は眉間にしわを寄せ、真剣に迷っていました。「毛虫と同じレベルなんだ!」と初めて息子のブロッコリー嫌いを理解しました。それは、さすがに食べられませんね。ブロッコリーと同等の栄養価のあるものに代えるというのもアリですね。小学生の頃、給食の牛

乳が飲めなくて、毎日、昼休みになっても牛乳と格闘させられている同級生がいました。今、考えると本当に可哀そうに思います。

★グルグル回る

これも昔の話です。“その場の基本”を練習するとき、子供同士の間隔が狭かったので、「ハイッ、両手を広げて、隣の人と触らないように間を空けて!」とジャスチャーを交えて指示したところ、入門したての年長のK君が、両手を広げてグルグル回り始めました。「両手はもう下ろしていいよ、ストップ!」と割り入って自制を促しましたが、私に気づかないのか、グルグルしながら両隣の子をわざと叩きだしました。そこで、かなり厳しく注意したのですが、こちらの指示には従わず、かなりの時間、笑い声を出しながら周りの子を叩きながら回っていました。それにつられて、他の数名の男子もグルグル回り出し、收拾がつかなくなりました。

あとで、お母さんにこの話をしたところ、急に感情的になり「空手を辞めればいいでしょ!」と激高していました。落ち着いてからお話を聞いていくと、幼稚園でも毎日トラブルを起こして、何と毎日、園にお母さんが呼び出されているとのことでした。目に涙を浮かべて、「もうどうしてよいか分かりません」と落胆されていました。まず、今の園では毎日叱られて自己肯定感が下がってしまうので、理解のある園に替えることを提案しました。すると、お母さん自身で“のびのび保育”を方針とする園を探してきて、そちらに替えられました(その後、一切、呼び出しが無くなったそうです)。また、お母さん一人で悩まないよう、専門機関で適切な診断をしてもらって、専門家と二人三脚で歩まれるようご助言しました。お仕事の関係でそのあと1年ほどで他県

にお引越しされましたが、そのお母さんとは10年以上、今でも連絡を取り合っています。K君、入門1か月くらいで、以下のようなエピソードも出るくらいに成長しました。

K君のお母さんよりお手紙をいただきました。

ご丁寧な返信を頂きありがとうございます。丁寧な文面から本当に先生のお人柄、Kへの愛情、保護者へのお心配り感じます。本当に感謝の思いです。

《僕にもできるんだ!!》体験入門初日の帰り、笑顔で目を輝かせていた息子の顔が印象的でした。涙が止まりませんでした。自分はできない。すぐ、怒られてしまう…。そんな場面が多々あるので、本人も親の私自身も、どうしたらいいか悩む日々でした。いつも自分本意な息子に落胆し、躰のできない母親だと自己嫌悪することも。「心のコップが上向きになれば、自分もできる。自分もかっこよくなれる!」その夜、靴ならべを主人にも自慢げに話していました。

幼稚園では二学期は行事続きで、連日の練習で落ち着きない様子を幼稚園からは毎日指摘されます。そんな中、お友達のお母さん方から、「K君、最近、頑張っているね」と言って頂けることがあります。それは挨拶です! ヤンチャで問題児のKですが(苦笑)。幼稚園の玄関で気をつけの姿勢をして、キレのある声で「おはようございます!」と自分から言うようになったのです!! これは本当に空手でのご指導あってのこと。嬉しい限りです。ご縁を頂けたことに、本当に感謝しております。K母より

★どうやって診断しているの?

医療機関では、精神疾患や発達障害の診断はどのように行われているのでしょうか? 世界的な診断分類の基準が2つありまして、そこに書かれている症状に当てはまるかどうかで診断されます。WHO(世界保健機構)が作成している疾病全般を扱っているICD-10と、APA(アメリカ精神医学会)が作成している精神疾患のみを分類したDSM-5です(数字は版の意)。お医者さんは、主にこの2つを元に診断していると考えて良いかと思えます(DSM-5はAmazonで誰でも購入可。ICD-11はWHOから発表済でこれから日本でも適用されて

いく予定)。われわれ指導者は医者ではありませんので、世間に出回っているデマ、噂、都市伝説のようなものに振り回されないよう、医療機関を通したICDやDSMに基づく適切な診断に従っていくことが大切です。

★お前、本当にやる気あるの?

とは言え、発達障害やグレーゾーンの子供たちは、空手指導の現場にも確実に存在しています。よって、すべてを医療現場に丸投げするのではなく、私たちも発達障害児の特徴や、一人ひとりに適切な声掛けの仕方について最低限のことは学んでおく必要があります(病名の診断まではするのは、オコガマシイですが)。

「言ったとおりの動きをしない」、「挨拶のとき目を合わせない」、「話を聞かずキョロキョロしている」など、みんなと同じことができない子はすべて「態度が悪い」、「本人の努力が足りない」、「不真面目だ」と早合点し、誤解してしまいがちです。人様のお子さんを預かるのですから、指導者には重大な責任があり、常に学びの姿勢が求められます。

指導者が一人しかいないなど、道場生一人ひとりに合わせたきめ細かい指導ができない場合、集団指導により、むしろ発達障害の子にとっては悪影響になることもあります。そのような場合は、思い切って入門をお断りするのでも誠意だと考えます。

PROFILE

■渡辺眞斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場で全国最多入賞を連続で記録する。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12

Column

どうやって道場生 350名に増やしたか? その 34

■弱者の戦略7 差別化(地域・営業方法)

今回は地域・営業の差別化について考えてみたいと思います。強者の道場は大都市圏で威力を発揮します。しかしながら弱者の道場が、大都市圏で強者と同じような営業方法で生徒の獲得を狙っても、強者の経済力、人的パワーに勝つことができません。

例えば、ものを売るときに、車やトラックでどんどん入っていくような広い道ではなく、自転車であれば入っていくような住宅街、田舎の地域でものを売ること考えます。巨大メーカーは袋小路だらけの狭い道は入っていきませんので、営業を諦めます。

そこで、弱者は自転車や徒歩で営業をかければ強者が入り込む余地がありません。このように弱者だけが独占できるような地域だけ

を狙っていきます。

これを空手で考えますと、生徒のお父さんの会社内で、社員限定の「健康 空手教室」ができないか上司に聞いてもらいます。他に、市町村のスポーツ協会(旧体育協会)が運営する市民の健康増進を目的とする体操教室のようなものがあると思いますので、その組織の中に入り込んでしまえば、生徒の獲得を独占できます。自分で営業しなくても、市町村が生徒募集をかけてくれますから自分でやる必要はありません。会社の中で社員対象の空手教室、市町村が運営する体操教室などの指導ができれば、強者の道場はあとから入って来ることができませんね。弱者はこのように、地域・営業の差別化を考えるとよいでしょう。